

吉田研究室で過ごした日々

元武蔵工業大学 吉田研究室 OB

羽倉 尚人

naoto_hagura@hotmail.com

1. 特別な日

東急大井町線尾山台駅の改札を出て左に進むと、「ハッピーロード尾山台」という商店街が環八¹まで続く。いつでも沢山の人が行き交う非常に活気のある商店街だ。2012年3月3日の朝、この日私は、いつものようにこのハッピーロードを武蔵工業大学あらためて東京都市大学²の世田谷キャンパスへ向け歩いていた。しかし頭の中はいつもと違っていた。我が恩師、吉田正教授（以降、吉田先生と記す）の最終講義のこの日、これまでの数々の思い出と、本番の段取りで頭が一杯だった。



Illustration by Saori Kinami

図1 尾山台駅とハッピーロード³

¹ 都内の幹線道路「環状八号線」の略称

² 東京都市大学 (<http://www.tcu.ac.jp/>)

³ ハッピーロード尾山台公式サイト (<http://www.oyamadai.com/>) より

2. 出会い

吉田先生との出会いは2003年の夏、研究室見学会のときであった。当時先生は、一般教養科目を担う教育研究センターに所属されており、研究室という器はあるものの、卒論生はいない状態であった。学部生向けの物理の授業と、大学院生向けの原子力関係の授業を担当されていたが、私はたまたまそれまで吉田先生の講義を受けたことがなかったので、この日初めてお会いし、お話を伺うことになった。

そもそもなぜ学科外の研究室に見学に行く機会を得たかということだが、当時学科主任をされていた相沢乙彦先生が、教育研究センターのような学科外の研究室へも希望があれば行けるという道を開いてくださったことによる。非常に幸運にして吉田先生と出会うことができた。

数名の仲間とともに吉田先生の研究室に入ると、デスクには大きな画面のマッキントッシュのPC、書棚には原子核物理や原子炉物理の書籍に加え、研究論文の数々がファイルされていた。また、デスクの片隅にはB777の飛行機の模型が飾られていた。研究紹介の中では、これまでに執筆された論文や、崩壊熱の学会標準について紹介、卒論テーマとしてどういうことができるのかといった説明があった。中でも、学会標準の作成者の一人として名前が掲載されているのを見て、「凄い先生がいる」と心躍らせたことを今でも記憶している。炉物理・核データ関係の研究室に入りたいと思っていた私は、吉田研究室に入ることに決めた。

3. 今日の段取り

ハッピーロードは環八まで緩い上り坂になっている。まだ時間が早いため、いくつかあるコンビニを除いて、ほとんどのお店は開店準備中だ。そんな様子を横目に、今日の最終講義の準備状況や段取りのことを頭の中で確認した。

これまでに出席のご連絡をいただいた方々は全国各地から90名を超える。改めて吉田先生の偉大さを実感した。従来、東京都市大学の最終講義では、先生ご自身による最終講義と懇親会の場での親交の深い方のご挨拶という流れが一般的である。しかし今回は、これに加えて、同じ分野で活躍されている研究者の方に特別講演をしていただき、出席者、特に学生に対して核データ分野について理解を深めてもらうことを目的とする構成とした。そこで、特別講演として吉田先生と30年以上親交のある東工大の井頭先生と原子力機構の片倉純一氏（現、長岡技術科学大学教授）にご講演を依頼した。お二人に特別講演の依頼をすると、非常にお忙しいにもかかわらず、快くお引き受けいただいた。井頭先生には「核データ研究最前線」と題して、核データの測定としての観点からお話をさせていただく予定である。片倉氏には「臨界安全と原子炉崩壊熱」と題してお話が伺える予定である。

続いて、吉田先生による最終講義。題目は「実験グループを求めて歩いた世界」であ

る。ライフワークとして取り組まれてきた崩壊熱の話や、東芝時代の話が伺える予定である。そして懇親会では、先生と親交の深い方のご挨拶のほかにスライドショーやビデオメッセージを用意している。

何よりも今日は吉田先生に楽しんでいただける会にしたいと思っている。

4. 「こちらから進んで出て行かないと」

ハッピーロードを抜け、環八の交差点を過ぎると多摩川まで下り坂である。大学までは後5分といったところだ。

吉田先生は常々「この坂の下にこもってはいはダメだ」、「どんどん外へ出て行かないと」と仰っていた。「世田谷の住宅街ののんびりとした空気の中に日々埋没していると、流れに取り残されてしまう。この坂の下までわざわざ訪れる人は少ないのだから、こちらから進んで出て行かないと」との思いがあったと伺ったことがある。企業から大学へ移られた先生は、大学に移った当初、学外に沢山仲間を作り、学内だけでなく外とのつながりが大切だと感じたと話されていた。実際、原子力学会の会合や、原子力機構、東工大や早稲田大、国内にとどまらず海外へも積極的に出かけて行き、様々に活躍をされてこられた。

この方針は、吉田研究室の重要な柱の一つであった。学会や研究会に積極的に出て行くように学生に対しても指導された。ちょっと敷居が高いと感じる海外での発表にもこの考え方が後押しした。このおかげで、本当にいろいろな経験を積むことができた。今でも原子力学会の学生連絡会⁴に参加する東京都市大学の学生は多く、研究だけではなく、多様な学会活動において、学外の方と多く接する機会を持つことができ、非常に有意義な経験を積むことができているのではないかと思う。

5. 震災 崩壊熱の専門家として

2011年は言うまでもなく大変な年であった。吉田先生は、崩壊熱の専門家として、数多くのメディア対応をするなど活躍された。震災直後の混乱した中で、可能な限り信頼性の高いデータを基に、必要以上に不安を与えないよう、冷静に、慎重に情報を発信することは大変なことであったと想像する。

未だ余震の続く震災から一週間後、大学の学位授与式の日、学生に対して「原子力業界はこれから非常に厳しくなるが、原子力の重要性は今後も変わらない」と仰っていたことが印象的であった。当時は、事故の収束に向けたあらゆる努力がなされていた。現在でも、福島復興、既存プラントの再稼働に向けた取り組みなど多くの問題を抱えている。

⁴ 日本原子力学会 学生連絡会 (<http://www.genshiryoku.com/>)

私は吉田研究室で、崩壊熱というテーマを通じて、一つひとつのデータを地道に積み上げるといふことと、それらのデータを大局的理論によって全体として捉え評価するといふことを学んできた。今回の福島事故に端を発する原子力を取り巻く問題に対しても地道な努力とともに、大局的に物事を捉え、どうあるべきかを考えることも同時に行われるべきであると理解している。

6. 46名の卒業生

研究室に着くと、既に沢山の学生が集まっており、最終的な準備作業が進められていた。準備に協力してくれた学生に対しては、この場を借りて感謝したい。

2003年の秋、本間君と私の2名からスタートした吉田研の学生は、2011年度には一学年8名の規模となり、この約10年の間にのべ46名が、吉田先生の指導を受け卒業した。

一卒業生の私が言うのもおかしいが、吉田先生ほど学生から慕われている先生はいないのではないかと思う。それは吉田先生の人柄によるものであると思う。人生で最後の「学生」としての時期に、吉田先生とともに過ごせたことは、これから先の人生においてこれ以上ない大切な心の支えになるといっても過言ではないと思っている。

7. そして本番

2012年3月3日13:30、2号館21C教室。続々と「聴講生」が集まってきた。



写真1 講義室 (2号館21C教室)

ここから先は、当日会場にいらした方のお楽しみとして、詳細な内容の紹介は、別の機会に譲りたい。以下に当日の様子を写真で紹介する。ご出席いただいた方は写真を見て思い出していただければと思う。残念ながら「欠席」された方は、写真を見て想像していただければと思う。

さあ、いよいよ楽しい講義の時間！

1971～2012 40年の仕事！

高速炉の核設計法と実験解析 1970～1980

(FCA, MOZART計画, JUPITER計画)

臨界安全等 1985～1990

原子レーザー法同位体分離 1985～1997

核反応断面積(核データ) 1970～1980

崩壊熱・崩壊データ 1976～2012

その他いろいろ 1997～201Q

図2 最終講義 目次



写真2 特別講演 (井頭先生)



写真3 特別講演 (片倉氏)



写真4 最終講義 (吉田先生)



写真5 東京都市大・中村学長



写真6 懇親会

8. 「感謝」の一言

吉田研究室で過ごした日々は、すべてが大切な思い出です。吉田先生には感謝の言葉しかありません。

先生は、学内においては、東京都市大学・早稲田大学大学院共同原子力専攻の東京都市大学側の初代専攻主任、学外においては、学会の理事、部会長、支部長などを歴任され、お忙しい日々だったと思います。どうぞこれからは少しゆっくりとした時間を持たれて、塩野七生のローマ人の物語を読み返したり、お気に入りの南仏へご旅行されたりしてください。

時には、自由が丘か二子玉川あたりで飲みましょう！その日を楽しみにしております。

以上



写真7 集合写真